

天風録

この世のあらゆる書物も／おまえに幸福をもたらしはしない。だが、書物はひそかに／おまえをおまえ自身の中に立ち帰らせる。ヘルマン・ヘッセの詩「書物」の一節▲人騒がせなウィルスの影響なのか、やけに市内電車がすいている。

先週末、広島市中心部の書店に立ち寄ると、一年半ぶりに復刊された月刊の小説誌が棚にあった。冒頭の詩は、その「小説現代」付録の文庫本カバーにドイツ語で記してあったもの▲今どき、休刊する雑誌はあつても復刊は珍しい。中身にも驚かされる。巻頭の150頁近くを割いて菜丸岳「告解」を一挙掲載したほか、短編やエッセー、それに漫画は読み切りばかり▲なるほどね。純文学と大衆小説の間にある。かつて中間小説と呼ばれたジャンルが廃れたわけはあるまい。連載ものの中心だと固定ファンは付くが、いちげんの客は敬遠しがち。そんな小説誌のイメージ一新なのだろう▲ヘッセの読書量は人並み外れだったらしい。足元には遠く及ばないが、書物の効用は小欄にも分かる。すなわち、本に感染症の退治は無理でも、怪しげなデマに惑わされない知恵を授けてくれる。しばらく自宅で過さず子どもたち、さあ、本を読もう。

読んだ感想を書きましょう。

天風録